

理想的な授業とは

宮城県仙台第三高等学校 普通科

要旨

私たちは、理想的な授業における本質的な要素の一つとして、生徒による能動的な参加が重要であるとの仮説を立てた。この仮説を検証するために、アンケート調査およびインタビュー調査を実施したところ、以下の二つの重要な知見が得られた。第一に、生徒が積極的に授業に参加しようとする意欲(以後、授業参加意欲とする)は、学習内容の理解度に良い影響を及ぼすことが明らかとなった。第二に、生徒が望む授業形態には、顕著な多様性が存在することが確認された。これらの結果を踏まえ、私たちは、生徒の望む授業スタイルに基づいて授業を編成し、生徒の積極的参加を促進することが、学習成果の向上に有効であると提案する。

1 研究の背景

私たちは、「理想的な授業とは何か」というテーマを設定し、探究活動を進めてきた。テーマ設定の背景には、今後の教育においては、生徒自身が教育の受け手としての立場にとどまらず、教育を提供する側、すなわち教員の視点を理解するべきであるという認識がある。

このように考えた契機として、仙台三高ではペア活動やグループワークなど、協働的な学習活動が多く取り入れられている現状が挙げられる。学習指導要領を参照した結果、現在の教育方針においては「主体的・対話的で深い学び」、いわゆるアクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善が求められていることが明らかとなった。このような状況を踏まえ、私たちは、より質の高い教育を実現するための技術に対して関心を深め、本研究に至った。

2 研究の目的と仮説

本研究の目的は、「理想的な授業」のあり方を明らかにすることである。

これに対して私たちが立てた仮説は、「理想的な授業とは、生徒が積極的に参加できる授業である」というものである。

3 調査方法

(i) アンケート調査

私たちは、設定した仮説の検証を目的とし

て、仙台第三高等学校六十一回生(当時一学年)へアンケート調査を実施した。内容は、以下の通りである。

- ・積極的に参加したいと感じる授業科目およびその理由
- ・積極的に参加した結果、学習内容が定着したと感じるか
- ・積極的に参加したくないと感じる授業およびその理由
- ・積極的に参加しなかった結果、学習内容が定着したと思うか
- ・生徒自身が考える「理想の授業」とはどのようなものか

(ii) インタビュー調査

上記の調査に加え、教員へのインタビュー調査も併せて実施した。目的は二つある。第一に、生徒が抱く理想的な授業観と、教員が考えるそれとの相違点および共通点を明らかにすることである。第二に、実際に授業を設計・実施する教員の授業への意識を把握することによって、「理想的な授業」の全体像をより多角的に捉えるためである。

内容は、以下の通りである。

- ・どのような授業を理想としているか
- ・1 単元における問題演習、解説、内容説明、ペア・グループワークの各活動に割いている時間の割合
- ・ペア・グループワークに対する考え方、および

実施時に意識していること

- ・授業内でどのように ICT 機器を取り入れているか
- ・自らが伝えたいと考えている授業内容が、どの程度生徒に伝わっていると感じているか

調査8 授業に関するアンケート

1. どのような授業形態をしていますか。

2. 授業運営、解説、討論時間、ペア・グループワークの割合はどのくらいですか。

3. ペア・グループワークについてどのように考えられていますか。また、その中で先生自身が意識していることはありますか。

4. ICT機器をどのように授業に取り入れていますか。

5. 伝えたい内容がどのくらい生徒に伝わっていると感じますか。(0～10段階) 理由なども書かれます。

※回答欄には必要に応じてグラフや図表を入れてください。必要に応じて印刷します。

4 調査結果

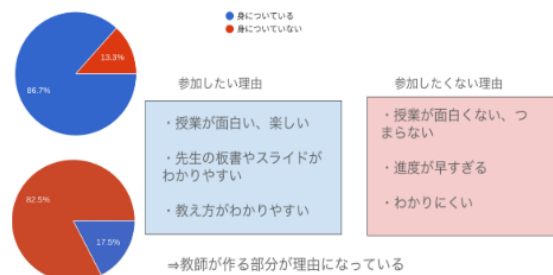
(i) アンケート調査

前提として、「積極的に参加したい」と回答した生徒は、授業参加意欲が高いと仮定する。

生徒へのアンケート調査の結果、授業に対して「積極的に参加したい」と感じている場合には、学習内容が「定着している」と回答した生徒の割合が 86.7%と高い数値を示した。一方で、「積極的に参加したくない」と感じている授業においては、その割合が 17.5%にとどまっており、顕著な差が見られた。

この結果から、授業参加意欲が高いか否かが、学習内容の理解度や定着に大きな影響を及ぼしていることが示唆される。

また、「積極的に参加したい」と感じた理由には、「授業中に会話ができる」「自習中心である」「興味が持てる内容である」といった点が多く挙げられた。これらの回答から、理想的な授業形態は生徒それぞれの学習スタイルや関心に依存しており、一様ではないことが明らかとなった。



(ii) インタビュー調査

教員へのインタビュー調査においては、授業に対する教員自身の認識と、生徒の授業参加意欲との関係に関して興味深い傾向が見られた。

生徒が「積極的に受けたい」と回答した授業の担当教員は、自身の授業内容が生徒に「2～4割程度しか伝わっていない」と認識している傾向があったのに対し、「積極的に受けたくない」とされた授業の担当教員は、「5～7割、あるいはそれ以上伝わっている」と認識している場合が多かったのである。

この結果は、授業に対する教員自身の向上心が、授業の質や生徒の授業参加意欲に影響を与えている可能性を示唆している。すなわち、教員が自身の授業を過信せず、常に改善を続けようとする姿勢が、より良い授業づくりには不可欠であると考えられる。

また、生徒へのアンケート結果と照らし合わせたところ、「積極的に参加したい」とされた授業においては、対話的なやり取りを取り入れた授業が比較的多く見られた。一方、「積極的に参加したくない」とされた授業では、一方的な解説中心の構成が多い傾向が見られた。このことから、生徒は対話を通じた学びに対して、より高い関心を抱く傾向にあると考えられる。

しかし、すべての対話的な授業が生徒に好意的に受け止められているわけではない。実際に、生徒が「積極的に参加したくない」と回答した授業の中にも、教員が対話的な活動を取り入れているとされるものが存在した。その一例として、ある授業では一部にペアワーク等の対話的な活動が導入されていたが、それが授業全体の中では限定的であり、実際にはほとんどが一方的な解説であったことが、生徒の印象に影響を及ぼしていたと考えられる。

5 修学旅行にて得られた知見

私たちは京都大学大学院を訪問し、教育学研究科の院生である市橋千弥様より貴重なお話を伺う機会を得た。市橋様は、私たちの探究発表を聴講した上で、アクティブラーニングを肯定するだけでなく、その課題についても認識しておく必要があるとの助言をくださった。加えて、京都大学の西岡加名恵教授による論文「日米におけるアクティブラーニング論の成立と展開」を紹介してくださった。

同論文において西岡教授は、アクティブラーニングの推進に伴い、「外面的な活動がアクティブであることのみが重視され、学習内容が単純化される恐れがある」と指摘している。この指摘は、アクティブラーニングが必ずしも学習効果を高める手段であるとは限らず、その実施にあたっては慎重な授業設計と目的の明確化が求められることを示唆している。

このような考察を通じて、私たちはアクティブラーニングの利点のみならず、課題や潜在的なリスクについても理解を深めることの重要性に気づかされた。すなわち、アクティブラーニングを効果的に活用するためには、学習内容の質や生徒の理解度にまで目を向けた実践が不可欠であると考えられる。

考察

abstract

We hypothesized that one of the essential elements of an ideal class is active student participation. To test this, we conducted surveys and interviews. Our survey revealed two key findings. First, whether students are willing to participate actively significantly affects their understanding of the material. Second, there are notable differences in students' preferred types of classes. Therefore, we suggest that class organization based on students' preferred lesson styles could be an effective method for enhancing learning outcomes.

本研究では、授業参加意欲の高い生徒ほど、学習内容の理解度も高い傾向にあることが明らかになった。この結果から、生徒が積極的に参加できる授業こそが、効果的な学習活動、すなわち「理想的な授業」の一形態であると考ええる。

以下、本研究の知見を踏まえた具体的な提案を述べる。

第一に、教員は授業の質を高めるために、授業内容や指導方法を定期的に見直し、継続的な改善に取り組む姿勢が求められる。生徒の反応や学習成果を客観的に振り返り、柔軟に授業を設計し直すことが重要である。

第二に、生徒の学習スタイルや関心には多様性があるため、個々のニーズに応じた授業形態を提供することが効果的である。アクティブラーニングを志向する生徒や、演習形式を好む生徒など、学びのアプローチは一律ではない。こうした多様性を尊重し、複数の授業形式によるクラス編成を実施することで、学習の質の向上が期待できる。

参考文献

西岡加名恵「日米におけるアクティブラーニング論の成立と展開」『連載 教育研究の現在 第6回』
高等学校学習指導要領(平成30年告知)解説
総則編